

石川県内の援助職者によるゲストスピーチ

医王病院ソーシャルワーカー 中本富美さん

まず医王病院の紹介をさせていただきます。

医王病院は神経筋疾患であるとか、重症心身障害児(者)の子どもさんを対象とした障害者医療に特化した病院です。もうひとつの役割として、石川県の子供のこころの診療拠点病院という風になっています。

その中に『食べられない 食べたくない 痩せていたい 太りたくない』普通に食べることができずに困っている子ども達がたくさんいらっしゃいます。

まず受診相談ですが、紹介は学校や家族であるとか小児科クリニック、急性期病院からいただいております。

その時の窓口になるのが、直接医師や私達が所属している地域医療連携室の看護師・ソーシャルワーカーが担当させていただいております。

対象は小児科ですので、主に児童期・中学生・高校生という方が多いです。

特別支援学校が併設されているため、入院治療中も就学が保障されるということで、入院を含めた相談というのが多くなっております。

摂食障害に関して困っている子ども達への診療とケアについて、私達は『多職種のチームで関わる』ということをしております。

※このような職種が多く関わります。

医師・看護師・リハビリ療法士・心理士・栄養士・薬剤師・ソーシャルワーカー・学校の先生

『多職種のチームで関わることの意味』ということですが、治療やケアを構想的に組み立てる、あるいはそれぞれの役割を明確にしていく。

課題は非常に多様だと思います。様々な職種の知恵と経験が必要ということ、色んな職種がそれぞれの視点で子供の理解を深めていく、ということが大事なのではないかということ、多職種で関わるということをして大事にしております。

多職種で関わるということは子供だけではなくて、家族や周囲への理解の促進、環境を整えていく事が大事だという風に考えております。

ソーシャルワーカーの役割ですが、当院の利用時の窓口になったということは先ほど説明いたしました。もう一つは学校との窓口ということですが、治療中、学校との連携や子どもの様子をお伝えをするということ。

もう一つは、退院後、通学時の家族送迎であるとか体育や部活の制限をするというところですね。とてもこれは大事だという風に思うのは、子どものいる場にやはり支援を届けるという意味だと考えております。

子どもは治療をしたら、元いたところに戻って行く。先ほど水上さんがおっしゃったように、退院する時がスタートというのは本当にその通りだという風に思います。子どものいる場に、私達の治療とケアがちゃんと生かされる。子どもが生きづらさを抱えながら、そこでちゃんと生きられるということを応援していくという意味では、学校との窓口が非常に大事ではないかという風に考えております。

摂食障害の子ども達に出会うとき私がいつも感じる事ということで、本当に実に厳しい病気だなという風に思います。水上さんが言われたように、本当に1人では頑張り切れない病気だなという風に思っています。

そして厳しい病気だなと痛感するのは、その症状に苦しむ事もそうですけども、子ども時代にその年齢の成長発達に必要な経験(勉強や部活であるとか、修学旅行とか色々なこと)は一つずつ、その子の成長発達に必要な経験ですが、それを制限しなければいけないということです。また、もう一つは、やはり地域でも社会全体でもまだまだわかりにくい病気と思われている印象があるのではないかという風に思っております。

子どもたちを取りまく環境を整えていく



これは社会全体で、子どもが今生きてる社会を俯瞰して書いた図です。

そして私が子ども達に伝えたいこと、子ども達に接する時にいつも思っていることということでは、私自身も言い聞かせている気持ちだと思うんですが、「1人じゃないということ」「いいこともそうでないことをお話してほしいということ」「ずっとこのままではないということ」「一緒に悩みたいってということ」これら伝えたい言葉は『子どもたちへ』と『ご家族へ』ということで、そういう気持ちで皆さんと接していきたいという風に思っています。

これが医王病院での実践ということと、ソーシャルワーカーの役割ということで皆さんにお伝えしました。